

## 早稲田・三朝庵と朝鮮民族運動

2018年9月11日 外村大

早稲田の老舗の蕎麦屋、三朝庵が閉店したとのことである。『日本経済新聞』2018年8月29日付には、三朝庵女将の語りをもとにした記事も出ている。「最近の学生は随分おとなしくなった。校歌を歌いながら歩いたり、大隈講堂前で夜通し飲んで騒いだりすることもない。近隣住民から苦情が入るから、大学が注意して萎縮してしまうのだろう。街は街、学校は学校で別々というのは人情味に欠ける。学校と街が一緒に発展してきたのだから、ちょっとさみしい」との言葉があり、同感するところもある（校歌を歌うのはどうかと思うが）。30年前くらいだったら、学生たちが“三朝庵を閉店に追い込んだ自民党政権の経済政策弾劾！”といった立看くらい出ていたかもしれないが（念のために言うと、旧左翼や、あるいは「新左翼でも老舗のセクト」はそんなことはやらないが、それとは別にそうしたセンスのある有象無象がいたのである）、もはやそんなことも期待できまい。

三朝庵をそんなに利用したわけではないが（早大生の平均的な利用回数よりも少ないだろう）、若干は三朝庵について気に留めていたことがある。以下、忘備録として述べておく。

前述の新聞記事では、尾崎士郎、井伏鱒二や竹下登、小淵恵三といった日本人の著名人の名前が出てくる。それはいいとして、三朝庵を利用したのは、日本人の早稲田関係者に限定されない。朝鮮人留学生も多数利用していて、そのことは同時代の史料にも記載がある。『東亜日報』1926年11月6日付記事「新興科学研究会 さる1日東京で創立」は、朝鮮人留学生たちが、新興科学研究会の創立大会を早稲田三朝庵で開いたと報じている。この新興科学研究会は、創立大会には、全日本学生社会科学連合会のメンバーである日本人も参加して祝辞を述べていることが伝えられていることからわかるように、マルクス主義系の組織である。同団体は、この直後に結成される（しかし何度も弾圧で崩壊、再結成を繰り返した後、最終的に1930年までには解体状態となる）朝鮮共産党の活動家を輩出している。また、1920年代後半には、日本在住の朝鮮人の様々な左翼系社会運動団体が結成されており、いくつかは早稲田周辺に事務所（というより連絡先であろう）を置いた。まず、内務省警保局が禁止保管し、日本占領期に米軍が没収したために今日、閲覧できるビラなどから、在日本朝鮮労働総同盟の事務所が、「東京府戸塚町源兵衛 144」にあり、朝鮮青年総同盟在日本朝鮮青年同盟東京支部の連絡先は「東京府戸塚町諏訪 160」となっていることが確認できる。おそらく新興科学研究会の機関誌とみられる『新興科学』を発行していた、新興科学社の住所は「東京府戸塚町諏訪 160」（在日本朝鮮青年同盟東京支部と同じ）、民族主義系と社会主義系の統一戦線運動体であった新幹会東京支会もその機関紙の発行所が「東京府戸塚町諏訪 199」である。なお、これらの雑誌を印刷していた、つまりハンゲルでの印刷を行い得る貴重な印刷会社であった同聲社の住所は、「東京府戸塚町下戸塚 297」となっている。

これは、当時の在日朝鮮人の社会運動を主導していたのが留学生らインテリであり、彼らがしばしば学生下宿が多数あった早稲田あたりに住んでいたことが関係している。新興科学研究会の結成総会だけでなく、これらの左翼系朝鮮人民族運動団体のメンバーもしばし

ば三朝庵で蕎麦をすすったかもしれない。

もちろん、これらの団体の活動家（後に朝鮮の政界、言論界等で活躍する人物が何人もいる）のうち、誰が三朝庵の常連だったかなどは確認するすべはない。ただ、後年、三朝庵に立ち寄り、色紙を残していったことから、在日朝鮮人の社会運動全盛の 1920 年代後半に、しばしばここで食事をしていたのであることが推測できる人物がいる。李承晩政権のもとで文教部長官、朴正熙政権期も諸大学で学長、教員を務めて、韓国精神文化院長にもなった李瑄根である。三朝庵に李瑄根の色紙が残っていることについては、確か 1995、6 年ころに、ある韓国の大学の先生から指摘されて知った。その先生もおそらく、早稲田に留学していた韓国人の学生から聞いたのかもしれない。色紙のコピーを確認すると、「忘じ難し自由の学園 大韓民国 嶺南大学 李瑄根」とあるので、嶺南大学（おそらくは 1960 年代末か 1970 年代初め頃）にいた時に書かれたものであろう。

李瑄根が学生として早稲田に在学していた時期は 1920 年代後半である。前述の新興科学研究会結成の時期ともかぶるが、前述の『東亜日報』の記事には彼の名前は確認できない。ただし、李瑄根は、解放後の思想、活動（韓国の反共政権を下支えするための「韓国史」を体系化した）からはイメージしにくいものの、新幹会東京支会には参加していた。同じ左派系の留學生が中心となった団体であるので、新興科学研究会にも関係していた可能性はあろう。

1930 年代に入ると、左翼系在日朝鮮人の民族運動は弾圧で衰退していくが、なおこの時期も、やはり早稲田と朝鮮人社会運動家とのつながりは存在していた。例えば 1936 年 10 月に朝鮮人劇団である朝鮮芸術座のメンバーが一斉検挙された際の新聞記事を見ると、安英一（安禎浩）の住所が「淀橋区戸塚町 1-321」となっている。ちなみに、この朝鮮芸術座への弾圧では、作家の金史良、詩人の金龍済のほか、1920 年代末から 30 年代にかけて左翼運動で活躍し、解放後、東亜日報主筆、日本で『コリア評論』の刊行を続けた金三奎も検挙されている。その金三奎は、出獄後に穴八幡の下で古書店を開いた。早稲田周辺に詳しい者には説明する必要もなかろうが、穴八幡は、馬場下町交差点を間にして、三朝庵と斜めに向かい合っている。

東京帝大生で本郷の下宿にいた金史良、早稲田には住んでいなかった金龍済は、ともかくとして、安英一や金三奎あたりは、三朝庵の蕎麦を食べていた可能性はあるだろう。もっとも、1930 年代半ばになると、早稲田周辺には朝鮮食堂も何軒かできているので、彼らが外で食事をする際にはそちらを利用した回数が多かったかもしれない。

もちろん、そんな話はどうでもいいが、早稲田の大学史の関係者は、三朝庵の著名人の色紙の調査や、三朝庵の経営者からの聞き取りなどを考えてもいいのではないだろうか。それが実現したら、朝鮮人の色紙もぜひ、気を付けて調査してほしいものである。